
かんちゃんって呼ぶな。

或徒真耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かんちゃんって呼ぶな。

【Nコード】

N7808T

【作者名】

或徒真耶

【あらすじ】

これはインフィニット・ストラトス通称ISに振り回される一人の少年にまつわる話である。変わった家に生まれ、変わった生活を送ってきた少年はISとどう付き合いどう過ごしていくのか。※この作品にはTS魔改造オリ主化した人物が主人公です。さらには設定改変や捏造設定、ところによりオリキャラや転生者（予定）が関わってくる可能性があります。基本的に作者のノリで書かれています。

とりとめもないはじまり。

恥の多い生涯を送って来ました。

とはいえ、恥を恥とも思わない厚顔無恥でもあるまいし、これから
も掻いて行く次第であります。

旅の恥は掻き捨て。

とはいえ、人生もまた旅のようなもの、恥を掻く事を恐れては何事
も成せぬと論じます。

問うは一旦の恥、問わぬは末代の恥。

知らない事は恥ではない、知らない事を知ろうとしない事が恥なの
だ。

つまり、何が言いたいのかと言うと、だ。

恥を掻くのを恐れていては縮こまってしまふ、恥を掻くのを承知し
て大きく生きろ。

とか、そんな事を言うつもりは全く無く。

ただ、当時はそんなつもりは無くても、過ぎてから思い返すと恥ず
かしい事があるなあ、ってふと

我に返っただけです。

僕に関して言えば、現在進行形な気もしておりますが……

インフィニット・ストラトス、通称アイエスIS。

宇宙空間での活動を云々とかいう歌い文句で開発された多様性スマルチフォームーツ。

宇宙開発云々を製作者が本気で考えていたかは、正直怪しい。

結果的に名を広めた「白騎士事件」を考えればそう思っても仕方が無い。

ミサイルを迎撃した？

戦闘機や戦艦といった軍事兵器を撃破した？

それは宇宙開発に必要なものなのだろうか。

どう考えても兵器転用されるのは目にみえていたはず。

天才だというISの製作者ならそんな事は解りきっていただろう。

そもそも、「白騎士事件」自体が自作自演らしき臭いがあるのだし、兵器転用される前提

で起こしたんじゃない、と当時の僕はスレた推測をしていた。

当時の僕は極度のインドア派だった、ざっくばらんに言うところプチ引き籠もりだ。

暇さえあれば、日がな一日インターネットをしていた。

他には趣味とも言えない読書ぐらい。

体が弱いとか病弱とかそんな大層な理由は無く、只単に面倒くさかった。

そんな五歳児、我ながら思い返すと恥ずかしいものである。

とは言っても、後悔はしていない。

インターネットで得た知識は——実生活ではほぼ無用だが——になるし。

インターネットでのお喋りでは得がたい友人——但しネット限定——

——も出来た。

問題があるとしたら、姉が酷い——病的なぐらいの——ブラコンになっちゃった事だろうか。

僕の名前は更識簪。

対暗部用暗部である「更識家」の十七代当主——の、弟である。

今でもインドア派な僕も更識の一人として暗部の振る舞いは出来る。むしろ、更識としての仕事も任されているし、遂行している。

趣味がインターネットというのは、詰まらない人間と思われそうではあるが、まだわかる。

しかし、特技が諜報活動、破壊工作、暗殺というのは人としてどうなのだろうか。

間違っても、言っではいけない。

よしんばゲームでの事だと思われても、痛々しい。

さて、人とは一風違う僕ではあるが、もう一つ変わった特徴がある。何故かISが反応する。

本来ならばISは女性にしか反応しない、はずなのである。

姉そっくりな容姿——違いは髪の毛が外はねか内はね——で、良く美人姉妹と間違えられる僕ではあれど、男だ。

いくら女性的な容姿をしていようと男には反応しない。

「ISを動かせる男」となれば注目の的である、世間的にも研究的にも。

しかし、公表されるどころか噂すら立たない。

更識一族が全力を挙げて隠匿カクレさせているのだ、それも我が姉が中心になって。

流石に政府としても更識との間に波風を立てるわけにもいかず大きくは動けない。

そういった意味では、女性的な容姿は性別の勘違いミスディレクションに大いに役立っている、嬉しくは無いが。

もっとも、一部の関係者は僕の性別を知っていて黙っている。

囲い込みとデータ取りとして、代表候補生なんてものになってしまった。

暗部とIS操縦者の二束草鞋は中々に大変ハードではありますが、充実した日々を……

え？ 学校はどうしたのかって？

絶賛自主休学サボリ中な僕に死角はありません、大丈夫です。

ああ、でも来年からはIS学園に入学するよう強制されています。現在IS学園一年である姉の頼みで。

しかし、IS学園といえばIS操縦者育成用の学校ではありますが、実質は女子高。

いくら女性的な容姿とはいえ男の僕が入学していいのでしょうか。姉の頼みを断ったら何をしでかすかわからないので、どうにかしなければいけません。

女装も暗部的嗜みとして出来ますが、流石に二十四時間三六五日は無理。

さて、どうしようか。

どんなに思索に耽たとしても、社会の流れが止まるわけではない。ちよつと、格好つけてみた、意味は無いけども。

単に、仕事がまわってきたのである。

内容は暗殺。

仕事として割り切ってはいるが、決して楽しい仕事とは言えない。

仕事を終えると急に飲みたい気分になったので、今は知人——年上の友人？——と飲んでいる。

相手は織斑千冬、戦女神として世界的有名人であり、代表候補生としての僕の先輩だ。

彼女とは何度となく飲む仲だ。

最初こそ未成年が飲酒云々と言っていたが、今はそんな事を言っただけではない。

飲みを誘うと諦めたように嘆息するのだが……

ちなみに場所は彼女の職場であるIS学園の寮。

勿論、僕は不法侵入ではあるが、セキュリティに引っかかるようなヘマはしていない。

もつとも、IS学園のセキュリティは更識が担当していて、癖を知っているからなのだが。

彼女の酒飲み話に良く出てくる人物が居る。

現在IS学園一年の妹とその一つ下——僕と同じ年——の弟だ。

僕は妹の方とは同じ代表候補生なので面識はあるが、弟の方とは面識が無い。

彼女が言うには、話半分に聞いても大変もてるらしい、勿論異性に。

同姓にもてる僕とは大違いだ、正直羨ましい。

そう思っていると顔に出ていたのか、彼女が嘆息する。
呆れた、という表情をしている。

なんなのだろう。

さて、僕と彼女はこの日珍しく深酒——つまり飲み過ぎてしまったらしい。

確かに飲んだ後の記憶が曖昧である。

アルコール成分——というより毒——に対する抵抗が高い僕には珍しい事だ。

目が覚めると天井が視界に入る。

実家の自分の部屋なら天井は木製で木目が見えるのだが、どう見ても木製ではない。

つまり、ここは自分の家の自分の部屋では無い。

後、僕は服を着ていない、勿論下も。

更には、横で誰かが寝ている。

髪は長いし、体の輪郭線ボディラインからすると女性である。

この女性も服を着ている様には見えない。

これは、酒に酔った勢いで、というやつだろうか。

そして――

「ん……簪、起きてたのか」

その人物が、織斑千冬だと言う事だ。

これはつまり、そういう事なのか。

とりとめもないはじまり。(後書き)

はじめまして、はじめましてじゃない人もはじめまして。

この小説の主人公は性格改変設定改変TS化という魔改造された更識簪です。

ちなみに転生者ではありません。

オリキャラで出しますし、もしかすると転生者も出すかもしれません。

基本的に、不敗の拳で使えないネタを放り込んでいくつもりなのでカオスになるかも。

この小説は息抜きで、メインは不敗の拳なので更新は不定期です。執筆が遅い私で、大丈夫か？

のほほんさんが書きたくて書いたはずなんだけど……
どうしてこうなった。

ISを扱える男“達”？

僕と千冬がなんていうかごによごによる関係になって凡そ一ヶ月。世の中は、といっても日本では——諸外国は九月に始業というのはざらにある——受験シーズンだ。

非公式ながらISを扱える男であり、代表候補生の僕はIS学園への入学が決定している。

義務教育が終わればのんびり家業を手伝うと進学拒否をしていたら、有無を言わずに決められてしまった。

特例として入学試験の免除なんていう事までやってくれた。大きなお世話というものだ。

アニメを見ていたら、テレビ画面が急に切り替わる。ニュース特報というテロップが出ている。

どうやらIS学園の入学試験で異常事態が発生したらしい。

ISが反応を示す男性が現れたという、それも二人。

一瞬、自分の事かと思っただが、違うらしい。

一人は、ナカヤトモアキ中谷智章。

もう一人は、オリムライチカ織斑一夏。

一人は全く知らないが、もう一人については予測が立つ。

苗字からして織斑千冬の関係者——恐らくは親類——だろう。

一人は最高の後ろ盾を奇しくも得て、一人は得ていない。

伏勢が荒れるかもしれない、仕事が目に見えて増えなければいけない。

倉持技研から連絡^{メール}が来た。

高い適正値を示した織斑一夏に専用機が与えられるそうだ。

数少ない、というより僕を含めて三人しかいない男のアイエス・オペレーターIS操縦者だ、実働データの収集を考えれば専用機を与えるのは正しい判断だ。

もう一人に与えないのはどうだろうか。

量産機でのデータが目的なのか、どうしようも無く適正が低いのか。しかし、どうしてそんな用件で僕に連絡があったのかと言うと、だ。織斑一夏の専用機開発をIS学園入学に間に合わせる為に打鉄式式の開発班から人員を割り振ったらしい。

打鉄式式というのは僕の専用機である。

どう考えてもこっちは完成しないだろう、どういふつもりなのだろう。

画像が添付されていた。

それはそれは見事な土下座だった、倉持技研の偉い人の。

僕は思わず「打鉄式式はこちらで引き取ります、開発頑張ってください」と返信してしまった。

七割がたは出来ているらしいし、何とかなるだろう。

僕の姉は自分で自分の専用機を組んだらしいし、話を聞いてみる事にしようか。

一分もしないうちに倉持技研から返信が来た。

今度は動画だ。

「ありがとうございます」と号泣しながらのジャンピング土下座。

見事とか凄いとかがない、吹いた。
僕のお茶を返せ。

あの後、久しぶりにインターネットでチャットをした。

会員制——特殊な認証が必要らしい——のチャットルームだ、何故僕が入れたのかは未だに知らない。

十年ぐらい前、大体白騎士事件の前ぐらいに廻り巡ってたどり着いたのが最初だった。

チャットルームの主催者であるハクという人物に気に入られて入り浸るようになったのだ。

昔はハクさんともう一人と僕ぐらいしか居なかったのだが、今は結構増えている。

お茶とお茶請けを用意してこのチャットというのが、僕のスタイルだ。

《システム…『バレッタ』様が入室なさいました》

・バレッタ…『おはよう』

バレッタというのは僕のハンドルネーム。

簪↓髪飾り↓バレッタ、という安直なネーミングとか言うな。

・ハク…『おはよう』
・ブロッサム…『おはようございます』

挨拶が返される、相手はナクさんとブロッサムさん。

この二人は昔から僕が入ると大抵居る、仕事とかはいいのだろうか。

・バレッタ…『ニュースが凄いですね』
・ハク…『ISを扱える男、という話題か。おかげで私も異動になった』

僕の推測ではこのチャットのメンバーはIS関係の職種の人ばかりに感じられる。

あのニュース関係で異動という事は、ハクさんは倉持技研に勤めているんだらうか。

まさかね。

・バレッタ…『その関係で僕もISの開発に関わる事になってですね。』

七割出来てるらしいんですけど、どうしようかな、

と』

・ハク…『なに……。ということはあれが……。』

・ブロッサム…『刀剣型の近接武器一本のみとか、よくないかしら』

・バレッタ…『いやいやいや、それどこの戦女神^{ブリュンヒルデ}デスか』

・ブロッサム…『そこまでいうなら、刀剣型の近接武器で我慢してあげます』

《システム…『龍娘々』様、『シズク』様が入室されました》

・龍娘々…『空間圧縮砲なんて良くない？』

・シズク…『それよりもビット兵器を使ってみませんか？』

- ・龍娘々…『なによ』
- ・シズク…『なんですか』

《システム…『シュレ』様、^{シー・ツー}『C2』様が入室なさいました》

・シュレ…『ふふん、バレッタならばワイヤーブレードを選ぶに決まっているだろう』

- ・C2…『拡張領域広げたらってぐらいしか言えないや、はあ』

《システム…『ザガートカ』様、『ギンネ』様が入室なさいました》

- ・ザガートカ…『ガトリングガン付きのランスとかどうかしら。

^{マルチスラスター}それでわたしを…：…いやんいやん』

- ・ギンネ…『多方向推進装置が便利だと思うわ』

メンバーが増えたかと思うとそれぞれが好き勝手に提案していく。誰もが自分の提案を譲らずに口喧嘩にまでなってしまうっている。いつものまとめ役のハクさんが黙っているのが原因だ。

- ・ハク…『つまり、全部載せればいいだろう』
- ・約全員…『それだ』
- ・バレッタ…『ええー』
- ・ハク…『決まったぞ、良かったな』
- ・バレッタ…『まあ、参考に見えます』

《システム…『バレッタ』様が退室なさいました》

なんというかチャットをする前に比べてすごく疲れた。

肉体的ではなく、精神的な気疲れではあるけど。

提案されたものを全部載せたら酷い事になる。

というより、いつまで経っても完成出来そうにないだろう。

それにしても、空間圧縮砲やビット兵器ってそれぞれが第三世代の特殊兵装だろうに。

打鉄式式の開発仕様書に添う形でいくつか参考にする事にして。

まずは現物が来てからかな。

あ、姉さんにも手伝って貰おうかな……でもなあ。

ついにIS学園に入学してしまった。

僕のクラスは一年一組。

周りの人間は知らないと思うが、担任は織斑千冬、副担任が山田真耶。

元日本代表と元日本代表候補のペア、つまりは私の先輩だ。

そして、ISを扱える男を三人全員集めている。

『世界最強』という立場を楯にゴリ押しでもしたのだろうか。

いや、その前にこのクラスは色々とおかしい。

イギリス代表候補生のセシリア・オルコットが居る。

あ、僕に気付いて顔背けた。

フランス代表候補生のシャルロット・デュノアも居る。
あ、僕に気付いて手を振って来た、振り返そう。
スペイン代表候補生のアリシア・バンデラスまで居る。
あ、僕に気付いた、目を反らそう。

「はい、お茶ですよ簪様」

渡された紅茶を一口飲む。

やっぱり紅茶は……あれ。

隣に立っているのは、三年生の女子。

眼鏡に三つ編みでいかにもな『仕事出来る風』の人。

「なんで虚がいるのさ」

のほとけうつほ
布仏虚。

更識家に仕える布仏家——といっても、更識の分家である——の姉妹の姉。

本来ならば僕の姉である更識楯無に仕えているはずだ。
ん、紅茶は虚の淹れるものに限るな。

「お姉ちゃん、私の仕事とらないでよー」

横で長くて余らせた袖をブンブンと振って抗議する一年生の女子。
顔立ちは虚に似ているが、かなりほんわかした雰囲気を出している。

のほとけほんね
布仏本音。

虚の妹であり、僕に仕える立場にある。

「ほらほら、本音騒がない」

くしゃっと、本音の頭を撫でながら――髪を乱し過ぎないように気を付けて――なだめる。
どうやら本音はこの行為が好きらしく、いつも大人しくなってくれる。

「てひひ、ごめんねかんちゃんー」

「かんちゃんって呼ぶなって言ってるだろ」

「わかったよー、かんちゃん」

……………はあ。

それにしても、二人の『ISを扱える男』だけでも。

一人はカチンコチンに緊張している、こちらは織斑一夏。

もう一人は周囲を見渡して驚きで顔を見渡しているんだけど……

シャルロットとアリシアと僕を見た時の驚きようがおいしい。

まるで、そう、有りえないものでも見たかのような。

代表候補生のミーハーならセシリアでも同様の反応をするはずだ、
ど、どういうことだ。

「簪様、そろそろ時間なので私は戻りますね」

「あ、虚――」

――よろしくね、色々と。

――かしこまりました。

ISを扱える男“達”？（後書き）

この作品は6割のネタと4割のノリと3割の悪ノリで構成されています。

あれ、3割多いけどいいか。

チャットの部分は境界線の地平線的なものから引用させて貰いました。

ハクは白。

（チェリー）ブロッサムは桜。

龍娘々は中国語で龍の娘、多分、読みはロンニャンニャン。

シズクは雫。

シュレは頭の文字をくつつけただけ。

C2はCで？。

ザガートカはロシア語で謎。

ギンネは銀音。

この作品はこのネタがやりたかったただけでもある。
つまり、みんな中の人。

フランス代表候補がいるのはまあ、次の機会に。

スペイン代表候補はオリキャラ。

なんで知り合いなのかも、多分次の機会。

ああ、やっとのほほんさんが出た。

のほほんさんが可愛すぎて生きてるのがつらい。

しゃるろっときねんぴ。

ナカヤトモアキ

中谷智章は一転生者と呼ばれる存在である。

前世の記憶を持ち、輪廻より外れ異なる世界へと生れ堕ちた者、それが転生者。

中谷智章は自分が特別だと思っている。

その根拠は神により転生した事と――

顔は十二分に美形と言える。

運動能力も高く、勉強も出来て知識も豊富。

更には男でありながらもISが反応する。

この三つの事柄により支えられる、彼の自信が根拠となっている。

中谷智章には目的がある。

彼は前世においてサブカルチャーいわゆるアニメやマンガ等を愛好する人間だった。

その彼がこの世界――インフィニット・ストラトスの世界に転生する際に望みが生まれた。

『原作ヒロインのハーレム』化、である。

自身にもたらされた全能感がかれを突き動かしていた。

IS学園に入学するまではほぼ順調と言っても良かった。

篠ノ之箒と束姉妹と出会わず、織斑千冬とも機会が合わなかった。

他のヒロインとは会えて好感度も上がっただろうし、何よりISを動かしてIS学園に入学した。

本番はIS学園からだ。

篠ノ之束もISを扱える男には興味を持つに違いない。

と、そう彼は考えていた。

IS学園に入学して、彼は驚愕した。

原作と違う。

シャル——シャルロットの愛称——が女子として入学している。

簪が四組じゃなくて一組に在籍している。

スペイン代表候補生なんて、原作に出ていたか。

と、彼の知識との齟齬が出てくる。

それでもめげなかった。

世界の修正力に違いないと、前向きに考えた。

原作にあったイベントを俺がこなしていけば大丈夫だ、と。

さて。

信仰心の欠片も無さそうな人間相手に神という存在が自ら出張するだろうか。

誤って殺してしまったお詫び？

神が全知全能ならば、間違う事など無いだろう。

では、何故彼は転生したのだろうか。

人間を塵とも芥とも思っていない存在、邪神と呼ぶべきものが行ったのだろうか。

悠久の暇を潰す娯楽として。

そして、彼の自信を支える三つの事柄は転生により与えられたもの。自らが掴み取ったものでない自信はどれほどに空虚なのかを彼は自

覚していない。

そもそもの話として。

イレギュラー

原作に存在しない想定外である自分が居て、どうして原作の通りに進むと考えるのだろうか。

つまりこの世界は、原作のインフィニット・ストラトスの世界とは違うインフィニット・ストラトスの世界なのだ。

そして、転生した人間としてではなく、その世界の人間だという自覚を持たなければならない。

I n v i s i b l e o u t .

更識簪がシャルロット・デュノアと初めて会ったのは去年の事だ。国家代表や代表候補生達による交流戦を日本とフランスが行ったことがある。

更識簪は日本代表候補生、シャルロット・デュノアはフランス代表候補生として参加していた。

その時の更識簪は専用機を持っておらず、使用したのはフランスデ

ユノア社製第二世代型ISラファール・リヴァイブ。

シャルロット・デュノアはその改良機^{カスタム}で専用機のラファール・リヴァイブ・カスタム？。

専用機と量産機では圧倒的に専用機の方が有利。

しかし、更識簪は量産機で専用機を打倒して、シャルロット・デュノアを大いに落ち込ませていた。

その後に行われた食事会、それが『始まり』。

グレーのスーツを品良く着こなした美丈夫が居る。

淡い金色の髪を後ろに流し、揃えられた口髭を蓄えた紳士然とした男性。

オーギュスト・デュノア。

シャルロット・デュノアの父親にして、デュノア社の社長を務めている。

今回の日仏交流戦は彼も観戦していた。

その彼が娘――シャルロット――の試合後不機嫌だった。

周りの人々は娘が負けたからだろうか、少し遠巻きにしていた時の事。

気を紛らわす為に、部下と仕事関連で連絡しようとしていた時の事。

「拡張領域の増量と展開を突き詰めれば第三世代の基準の特殊兵装満たせる気がするよ。」

それに、ラファール・リヴァイブの性能と汎用性の高さも併せれば脅威でしょ。

イギリスは専用の適正、ドイツは多量の集中力、イタリアは高水^{ハイレベル}準の運用能力が必要だしね。

『欧州統合防衛計画』だったって、フランス機をベースになんて

可能性も出そうだよね」

日本語では寝耳に水と言うのだろうか。

正しく天啓、オーギュストは目から鱗が出る想いだった。

今の彼の心境を表す言葉がある。

『その発想は無かった』

オーギュストは慌てて発言者を探すと、すぐに判った。

娘と話している日本の代表候補生、娘を模擬戦で負かせた相手、更識簪。

足早に二人に近づいて行く。

オーギュスト・デュノアはこの時、極度の興奮状態だった。

シャルロット・デュノアは近づいてくる人物に気付いていた。

オーギュスト・デュノア、彼女の父親だ。

負けた事を叱責されるのだろう、そう思った。

シャルロット・デュノアは『愛人の子』という負い目を感じていた、この時までは――

「更識簪君、君は我が社の……いや、フランスの救世主だ。

気に入った、デュノアの婿に来ていいぞ」

更識簪の両肩に手を乗せて、一息に言った、言い切った。

オーギュストは以前とある噂を耳にしていた。

日本の代表候補生に男がいるという馬鹿馬鹿しい噂。

オーギュストも勿論噂にしても酷いものだと思っていた、のだが。

至近距離で見た、そして体つきの手触りを感じた。

オーギュストは一つの会社を背負い反映させている聡明な男である。瞬時に噂は真実だと、そして噂の対象は目の前の相手だと確信した。普段の彼ならば、口にせず交渉の手札にするような男だ、だが——もう一度言おう、オーギュスト・デュノアは極度の興奮状態だった、自重を忘れるほどに。

「ちょ、え……何言ってるんですかお父さんっ」

はじめに我に返ったのがシャルロット・デュノアだった。

思わず言葉が口から出てしまう。

慌てて口を手で押さえるがすでに遅い。

怒られると思ったシャルロットだったが、そうはならなかった。

また、シャルロットがオーギュストに面と向かって『父』と呼んだのはこれが初めて。

シャルロットの目には必死に電話をかけているオーギュストが映っていた。

「聞いてくれミレーヌ、シャルロットが私のことを『お父さん』と

ああ、今日は最高の日だ。

そうだ、今日からこの日はシャルロット記念日とするように大統領に——」

目の前の人は誰なのだろうか。

シャルロットはそう思った。

シャルロットは置いてけぼりで、簪はほぼ空気。

『なんですって、私^{わたくし}なんて目も合わせてくれないのにつ』

電話の相手は本妻のようだ。

本妻に初対面で殴られていたシャルロットには何がなんだがわからなくなった。

「それは君がメイドの言う事を真に受けて昼ドラを真似るからだろ
う。」

『仲良くなるには昼ドラの継母を真似る』なんて信じるほうがおかしいぞ。

だから君は世間知らずだって言われるんだ」

『そ、そんな……だって……私^{わたくし}だってシャルロットさんとお茶したりしたいですわ。』

娘と一緒に買い物に行くのが夢なんですのよっ』

あれ、おかしいなあ、とシャルロットは困惑している。

父親とその本妻が電話ごしで娘をどれだけ大切にしているか自慢をはじめていた。

「なんだが、僕には溺愛してるけどふれあい方がわからない親馬鹿に見えるよ」

「……うん、僕にもそう見える」

簪の言葉にシャルロットは同意する。

思っていた二人の像と乖離が激しいのだ。

『シャ、シャルロットさんの声が聞こえましたわ。

ままままま、まさかそこにい、いるんですの……?』

「うむ、なにせここは交流戦の食事会会場だしな」

『それを先に言いいなさいなこの唐変木。

すーはーすーはー……しゃ、シャルロットさん』

「は、はい」

『初対面の時はぶってしまつてごめんなさい。

マリイさんみたいにはなれませんが、で、できれば私の事わたくしも母と

……』

マリイ——マルグリット、シャルロットの母親の名前だ。

愛称で呼ぶほど本妻と親しかったのか、とシャルロットは疑問に思った。

答えをくれたのは父親。

「ミレーヌはマルグリットを妹のように可愛がついて、マルグリットも姉のように慕っていたよ。

もっとも、可愛がられすぎてうんざりしてマルグリットが出て行ってしまったのだね」

苦笑しながら言っていた。

なんだその理由は、と。

思わずシャルロットも釣られて苦笑してしまう。

「そ、その……改めてよろしく願います、お……お義母さん」

『……………ブツ』

何かが勢い良く噴出する音が電話越しに聞こえた。

『奥様、鼻血が』と慌てるメイドの声が聞こえる。

『落ち着きなさい、それでもデュノア家のメイドですか。』

これは鼻血なんかではありません、シャルロットさんへの愛が溢れてしまっただけですわ』

偉くかつこいい言葉を言っていた。

でも、鼻から出てるのは否定していないのだが。

「良かったね」

「いきなりどうしたの、簪さん」

「嬉しそうだから」

「うん、そうだね……嬉しいから、かな」

これが『シャルロット・デュノアの始まり』。

「そういえば、簪さんって男なの？」

「……………他言はしないでね」

「あはは、りょうかい」

しゃるろつときねんぴ。(後書き)

私は特に転生アンチというわけではありません。

与えられて我が物顔で尊大になるのはなー、って思ったりします。ちゃんと享受する努力をしようって、考える天邪鬼ではありません。

中谷君のコンセプトは比較的テンプレなダメ転生者。

改心すれば良さげなキャラ、そんな立ち位置。

転生させた神は不敗の拳で出てきた邪神さんのイメージ。言葉を文字通りの意味で受け取る。

王の財宝、開けるだけ中身無し、とかやるタイプ。

さて、いきなり過去話。

やりたかったことその2、シャルの親が親馬鹿だった場合。

第三世代云々は無茶ですけど、それもありかな、ぐらいで考えて下さい。

父親は生真面目タイプ、本妻は世間知らずお嬢タイプ。

母親は天然マイペースタイプかなあ。

きっと、本妻公認で仲良かっただろうなあ。

唐突でしたが、これが男装しなかった理由という事で。

もしも男装して入学した場合の理由。

「ISを扱える男がシャルロットに惚れでもしたらどうする！」
親馬鹿でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7808t/>

かんちゃんって呼ぶな。

2011年6月9日16時00分発行